

第3回琴浦町小学校適正規模・配置審議会 会議概要

日時 平成20年7月9日午後7時00分～午後9時10分

場所 まなびタウンとうはく 4階 研修室

教育長挨拶

第3回の琴浦町小学校適正規模・配置審議会にお集まりいただきありがとうございます。第1回目第2回目と、琴浦町小学校の現状について話し合ってもらいましたが、第3回目からは、皆さんのお考えで、現状等も踏まえ意見交換していただき、まとめていただけたらと思います。教育委員会では、皆様方から資料等のご請求がありましたら、ご審議の参考になるものは極力出していきたいと思っております。

会長挨拶

お手元に6月17日付けの日本海新聞の記事がありますが、文部科学省でも公立小中学校の統廃合の方針を固め、1年をめどに中教審で方向を打ち出すとの報道があった。これはこれとして、琴浦町として活力ある小学校教育のあり方を、学校運営・学習活動・発達課題・施設整備・教職員組織等の視点から審議していきたい。

前回、委員が周囲の方々（子供、卒業生、大人）から聞ける範囲で聞いた意見を持ち寄ってはどうかという意見を受けて。

《各方面から求めた意見状況》

- 6月の学校公開のときに、参加者に統合についてのアンケートを実施し150名参観に来られ、約80名の方にアンケートに答えてもらった。

まとめとして、学年あたり1学級25～30人の2クラスで、全校児童数250～300人位、通学距離としては3キロ以下で通学時間は30分以内との回答が多かった。

統合の必要性を聞いたところ、必要、不必要が半々で若干必要と答えた人の方が多く、問題は30～40代の子育て真最中の人で、分からないと答えた人が3割くらいあり、統廃合の問題を身近に感じていない人が多かった。おおかたの人は必要性を感じているが、今のままでよいと思っている人が多いと感じた。

統廃合によって校区が広がることで、いろいろ不安があるのではないかと。たとえば、不審者であるとか、PTA活動、登下校の距離や時間などの心配がある。また金銭的な面でも、今の校舎で入れるのか、新しく校舎を建築した場合、財政的に苦しくなるのではとの意見もあった。

PTA の会の中でも審議会の話をしていながら意見を求めるが、まだ身近な問題として考えてもらえていないところがある、もっと情報発信をして、意見を汲み取ってこの場を出して行きたい。

- この学校では、アンケートの中に保護者のそれぞれの思いが出ているのではないかと感じた。
- 中学校で4小学校卒業の生徒に、小学校時代それぞれ良かったこと、困ったことを聞いたところ、特にそのようなことはなかったとのことで、子供は人数が多い少ないはあまり感じていないのではないかと思った。
- 先生の意見として、人数の多少は関係ない教育、物事に臆するのではなく、子供を強くし自信を持たせる教育、それが教師の役目である。そのとおりの教育がなされていると保護者も実感している。

卒業生の意見として、過去には中学生になって不登校になる学年もあったが、現在はそのようなこともなく、新しい友達ができて楽しく通っている。また小学校のときは、何の不自由も無く過していた。ただ球技など運動するときに困ったことがあるが、他学年などと一緒にやることであまり支障にはならない。人数が少ないとそれぞれのいいところを認め合っている。

保護者の意見として、学校が地域の中心として根付いており、PTA 活動も誇りを持って行っている。また、子供たちも地域の人たちに、可愛がってもらっていると感じているのではないか。教育面でも一人になっても頑張り切る力をつけてもらっている。そういった面でも教育効果は大きいのでは。子供にとっていい環境とは、生まれた地域で育つことが大事であると思う。

- 人間関係を豊かにするには統合したほうがいいという意見や、どこの学校もまだ新しいのに、なんで統合しなければならないのかと素朴な意見もあった。
- いろいろな意見を聞くが、学校に大小あるがそれぞれの良いところを生かし、いろんな工夫の中で教育されていると思う。そういった意味で現状維持がいいのではないかとの意見もある。自分としてはある程度の規模が必要ではないかと思っている。
- 保育所保護者会の意見を聞いたが、統合やむなし50%、出来れば現状のまま25%、絶対現状維持25%との意見であった。このような意見を聞くと、やはり結論を急いではいけないと思った。財政的な面や、現実を見据えて考えて行きたい。
- スポーツ少年団など合同チームで活動しているが、保護者会等はすっかり活動が出来ない。学校が合併した場合 PTA 活動などもうまく出来るか心配。また、子供が中学校に入学して生き生きしてきたが、これは4小学校

から集まってくるので新しい環境がよかった。やはり小学校6年間、中学校3年間同じ仲間では、新鮮味も新しい発見もなくなってしまうのではと感じた。

《学校・組織運営》

- 中学校では、子供たちを見てこういうことがあるのかなというようなことを感じられたことはありませんか。
- どの小学校出身であるかで、特別のことは感じていないし、思ってもいない、生徒個々の事でのサポートはしている。
- 小学校では、中学校に進学にあたり特別なことはしておられますか。
- 特にはありませんが、児童が数人のクラスもあり大きな集団となるときに心配する面もある。一方、小規模校ゆえ保護者の学校教育への関心が高いし、地域とのかかわりも大きい。また現在は、複式解消ということで、町から加配の先生をつけてもらっているが、これがなくなると、特に5・6年生が複式になった場合、1人の先生で学級運営ができるのか心配している。

将来的にも地域に学校があってほしいという気持ちもあるし、児童がさらに減少することが見えている中で、どうなのかと思っている。
- 小さい学校にはそれを逆手にとって仕組める活動もたくさんある。たとえば大きな学校はなかなか全員が体験できるような活動が出来ないが、小さい学校は容易に行える。また異学年の交流も盛んで、今の人数での不都合さは無いように思う。
- 人数が多くなれば先生の目が届かなくなる、しかし子供にとっては、多人数をまとめるためにリーダーシップを発揮しなければならない部分もある。また異学年の交流も工夫しながら行われている。子ども自身は、どのようなことになっても柔軟に対応できるのでは。反面 PTA 活動は現在でもまとまらない部分もある。
- 保護者の方が学校に求める要望は、先生に対する要望が多い。先生側から見ると、大規模校では個別指導で、小規模校では校務分掌で非常に忙しい。そうやって見ると適正な規模で、先生の配置をするのも良いのでは。
- 校務分掌については、学校の中でそれぞれの先生が学校の校務を分担して受け持っています。大規模校はうまく割り振り出来るが、小規模校は1人の先生がいくつかの分掌を掛け持ちでやられる場合もある。
- 今まで、子供の数での小規模・大規模を論じたが、子供を取り巻く教師集団どうなっているか、事務局に資料の提供を求めた。
- [資料の説明] 17年度～20年度の児童数・学級数による教員数と、

町が独自に加配(8人)として配置した教師の実人数です。21年度～26年度の表は、各学校1学年の児童数を40人で割った学級数と、教員配置基準により算出した教員数です。

- PTAの会で、この学校には、何人の児童に何人の教師がついているのか。また、町内の他の小学校はどうかという意見があり調べてみたら、この学校は児童12人に対して教師1名、小規模校のある学校は児童3.9人に対し教師1名だった。町内の学校であっても、先生と児童の割合を見ると同じ状況が作れていないのかなと感じた。

《適正な規模》

- 1学級の人数は、本当に何人が適正か、文部科学省は1クラス40人、学校全体のクラス数12～18を文科省は標準といっている。鳥取県では1・2年生は30人だが、琴浦町では何人くらいが良いか、そのことも踏まえ考えていかなければならない。
- 全学年30人学級がいいと思う、41人にぎりぎり満たないクラスでは、確かに指導等辛い面がある。しかし学校と地域との協力関係は大切で、人数の多い所はそれをプラスに、少ない所でもそれをプラスにとらえて学校活性化に取り組んでいる。
- 小規模校はいいですよというような意見が多いが、大規模校でも40人未満のところは1クラスで、あと数人増えれば2クラスになる。そういった面では、統合も良いではないかと思う。
- 学校規模の大小により良いところ、悪いところがあると思うが、急いで結論を出すべきでなく、子供にとって楽しく行ける学校、先生が子供の小さな変化にも気づく位の大きさが、適正規模でないかと思いました。
- 文科省は基準により教員の配置を行っており、小学校1年から中学校3年まで、1クラス40人で41人になれば2クラスになります。学級というのは、生活集団と、学習集団の2つの機能を持っている。日々の生活集団は10人や20人でいいのか、ある程度の数があった方がいいのでは。確かに学習集団は少ない方がいいと思うが、県は、小学校の低学年では、両集団とも30人がいいということで、義務教育のスタートをしている。3年生以上については、加配の先生を入れながら、学習集団は少なくしているのが実態です。
- 文科省の示す標準学級数は12～18で、1学年2～3学級としている。自分としては、1学年2クラスが、競争も出来て良いのではないか。
- 統合した場合教室数はどうか。
- 4校がそれぞれ1校になった場合、現状では厳しいが将来的には可能で

あり、考えておかなければならない問題。また、新しくするような場合は、小中一貫校的なものも視野に検討が必要ではないかと思っている。

- この委員会は、今の教育がこのまま続くということではなく、中長期5年・10年先をイメージした教育のあり方を考えていく。
- 小中一貫校の先進地に視察に行ったが、その中で、中学生の役立ち感を育てることも大事で、こういう教育もいいなと感じた。また琴浦町でも琴浦9(ナイン)で中学校まで見越したプランも作っているので、実行段階では一貫教育もいいのでは。
- もうひとつ考えて行きたいのは、中学校では教科担任制でいろいろな先生が教えるが、小学校では学級担任制で、たとえば芸術分野など情操教育は、専門の先生の方がいいのでは。また小学校に英語教育も入ってくれば、英語の先生も必要で、小中近接してあれば、いろいろな取り組みが出来るのでは。
- 小中一貫教育は自分も興味を持っている。それは、従弟の子が付属小学校にいて、その学校は国際交流や、外国語、国際文化等に力を入れていて、そのカリキュラムを見たときに、わが子とぜんぜん違うのに驚いた。やはり琴浦町なりの教育をしていかないといけないと思った。

《地域の学校とのかかわり》

- 合併後の住民の感情というものも頭に入れておかななくてはならない。たとえば校区再編のときに、そういう感情をどう解消していくかを考えていかななくてはならない。
- 地域と学校の結びつき、地域の教育力をどう高めるかという視点の議論も必要では。
- 地域の考え方が、いまだに昭和30年代の合併前の旧村単位の捉え方となっている。地域の教育力というよりも、縄張り意識が強い。地域というのは琴浦町全体で考えるべきで、学校の統廃合などになると地域エゴが出てくる。こういうことを契機にそのようなことも考えて行きたい。
- 以前中学校の統合のときに、反対したある地域では同盟休校などした例がある。そこで学校は、「和を持って尊ぶ」を校訓として融合するよう運営されてきた。東伯でも50年前に学校統合があったが、そのあたりの気持ちはどうだったか。
- 中学生のときに、古布庄中学と聖郷中学が統合となり、最初は半数くらいが聖郷中学に通い、反対して残った半数は1年後くらいに一緒になった。最初一緒になった時は、勉強のやり方も違うし、少し戸惑いもあったが、徐々に仲間に入れてもらった。やはりそのころの記憶は現在でもぼんやり

残っている。小学校、中学校と小規模校の悲哀というものも味わったが、逆にそれをバネに頑張らないといけないと思った。

- 具体的に統合となってくると地域のことがどうしても出てきて、PTAの代表として意見を言うと大変難しいが、町民の代表として、琴浦町の将来像をどうするかを考えてやっていくのが良いではないか。また行財政改革審議会で、答申が出されているが、財政的な面の資料を出してもらったらどうか。
- 行財政審議会の中でも同じような議論をした。その中でも小規模校の良いところ、大規模校の良いところ、いろんな意見が出た。統合になれば地域感情が先行し、なかなか意見がまとまらなかったが、やはり町の財政状況や、子供の推移を見ればやむをえないと答申が出た。この会では、いろんな状況を見ながら、地域感情を越える結論を出さないといけない。

《財政面》

- 以前の旧町で、統合について検討された経緯をもう一度お聞きしたい。
- 旧赤碕町では昭和50年代に、4小学校とも古く、子供の数も、年々減っていくということもあり、整備検討委員会を立ち上げ、近隣の統合小学校を視察し検討したが、結果的には4小学校改築との結論となった。
- この場で話すことでもないかもしれないが、よその町では保育料が安く、若い世代が多く住み、保育所の入園者が多い。子供が減って学校統合と寂しい中にも、子供を増やす取り組みも大事でないかと思っている。
学校には大小それぞれ良い所はあると思う。学校の適正な規模・配置とかは、子供たちから見ればあまり関係なく、その中で皆が一生懸命やっている。そこには行政側の思惑が出てきてしまうところで、そこを隠しながらの議論でなく、現実このまま行くと学校の経費と町財政の将来の推計等が示せるのなら、それも踏まえた議論が必要では。

《まとめ》

- いろいろな話を、出し合い熟成させながら結論を導いていきたい。事務局に次回までに、財政面と、今日の話のまとめを宿題とします。
- 次回は9月中旬午後7時に開催
内容は、今日の話をもとめたものと、財政面について
- 閉会9時10分